嵐峡花月奇譚

あ

貳

特
入 遠 3
967
2

遠門 13
號 967
卷 2

本清

嵐峽花月奇譚 巻之二〇

平安 瀬川恒成著

第二回

鰐口忍術宝刀を偷む　茨木奸計主君小反く　話

且説鰐口林三ハ。身軽ゑ打扮。忍ひ装束。具足ヲ一口の。腰ゑ横くゝ。夜もふけ人もしづまるころ。茨木汗立いで城内さくゝいそぐ。頃しも五月上ゑ八日。ふりつゞくる梅ゑ雨。小止なきゑ潜ぶゑい。究竟一と念だ。城圍らくゝひろふ。鉄ゑ門かくゝ鎖して。裡ゑい

宝文堂蔵

守護は番卒等。柏子木と撃篝と焼く。甚厳重に守りて
居る。かくて輙く門内へ入ること難し。戸を立てて印を
結び咒を唱ふるなどふ。しぐやは護りは兵士ホ。ちらり小眠
と催しくやがて柏子木は音もなく篝もなく高軒。
高瀬は小舟をこぐ櫓は音いでくよるとゆれば。時分はよ
しと高塀を。潜踰えて裡へ入る。典膳が説話なり。裡乃
案内いとくしるし。夜は深くと更ぬりて艸木も睡る頃
ふしあれば。誰見とがむる者もなく。心はまつ小徘徊して。豫
てねらつる宝蔵をしのび入り宝刀は莒と捜索る不敵の曲

なれ。難なく宝刀取出し。抜きあらためうち視まが。銘是
なる剱は光を。暗き秋は夜の霜よりも猶ひやこの
ごとく。身の毛もよだつ。やがて己が腰刀を抜きふ
てんぐべふふ。寸尺とつひ反くいひ。大くれくらいざれば。
心は裡に歓びて。目針をぬき鞆と離しを。吾佩刀とうの
名剱の。中心と中心をとりかへる。原はこれを扱へる。己
が腰に先佩つ。己が佩くる刀は中心に彼名剱はそやとつ
と。合しく頓て赤地の錦の袋におさめ。手ぐしくに莒に
納める。慌忙しく原の処に立くふ。ぐ番卒れどりと

聖文堂蔵

覚さんと。備森ぐさふと者どもやとつぶやきるぐ〳〵年ふり
し。松が変ゑ諸手とうけ。猿ぐさ〳〵木づたひ昇る。
数十間ふる堀の上と。身をおどゝして飛鳥ぐさ〳〵。前
面の岸へひら〳〵と飛下る。仕すまし〳〵と舌うちして。
典膳がやゝきへと心ざす。立くゝる。後ゆくに人あり〳〵。
曲者中ぬと声うけあへば。林三が刀ぐさこゝとゝとゝくゝ
ひらへ引りどんと。ころるも白者身をうゝし。ふりかぐく
と又つけ入る。組づくれつ手練と手練。黒白もさうね
〳〵き夜ゑ。雨いゝきりふるふる。身ともとゝ泥道

ゑ。組ふせられつ反うへ〳〵。上ゑなり下ゑなり半時だうゝし
ぐゝ〳〵。かくていてゝゝと肋肚当身ひきなるうゑ
林三苦とさけびて悶絶〳〵。彼曲者ハ林三がこしのは
うゝと掻分て。おびくる力とうゝひとり。押いぐゝてこゝゑ
さゝうへうゑ死骸と堀の中へ。水とるげこゝひゝり笑
して。東をさゝ〳〵立くゝる。是則別人ふゝゝ茨木典膳
良辰ゑ。昼ゑ。鰐口とうゝひゝ名叙とゝゑ
ゑゝ中りゝれども。このゝぐゝゝ素牢人。りも人ゝやりし
さんゝ。影ゝ護ゑりゝゝ。潜ゑりとゝ来ゑ。郷

両雄
闇夜に
宝剣を
排む

より此処に待ぶせしく。これが飯路とうりぐい居り。遂に彼と殺害し。主刀と畧奪るなり。此刀より絆れそりく此一条は奇談となれり。さても茨木典膳は。鄭ロと暗殺し。難ふく刀と得てしうべ。心中よろこび忙しく。我家よりくる頃いとや。夏は夜みじかくして。八声の鶏のふくころなるふ。妻は枫も庶之進も。例の然気ふ悶乱して。種々譫語しつ。或ハ夫とのたまくて。言もくくしき息とつき。ちるべ此処へまくでさて。頼しうひも七布八布。帆谷は巣穴は掘おのして。吾ぢりうい九族まで。名残ふく中さ

殺せしくハつきじ。茨木じの兆しくる人と斯ぢりそ。いそぐそうべ果ぢもうぐ三日や四日の内。逼りあくもも父親は。ふしいれば。誰人ゝ是とも。そしらんや。却て人は誉べきふ。人の讽諫も用ひしそ。いそぐて埋さて。うい長は病着ふ。愛相や竭くるゝ。夫ぢりうハ妻子ぢまで。うくる苦痛とせつるい鬼くし忍くる。斯恐ろしき人ゆしも。附そひおりく老髐いぐ。此上いうる憂目やつんとてくれるふ今てくく。親子りうも焼ゆへ殺しくべと。淳辞とつもくくしき然病ふ。言は兼さへも

四度路なるらしきハ執念。妖蛇のいたするかしん浅猿や。それ苦痛を助んとや。種々心をくるしめて。最もねがはき名剱を。もとめ得されバ何時までかくも憂目をうけるべきぞ。朋ハあれども名剱の。徳に妖蛇のおそるゝなれバ最早苦痛も止まざと。猶もかくまでくるしむハ。若此刀宝刀ならで。我わさしなる刀なるか。彼林三と一言ハことばよりハさんだ殺害なし。略奪なる此刀。真偽いかにと行燈と。ひざ元ちかのく撃よしく。潜わきより中心をしれバ銘晃ととくえんきわらりて。幽みえる飛竜ハをぞる。豊城三尺の氷。呉宮

一函の霜。寔に稀世の宝の剱。神竜これがためハ吟じ。鬼魅是がために夜なくべし。典膳是を観て奇なり奇なりと賞賛し。貪視て餘念なかりしが。稍ありて心つけバ妻子が臥房に持て行て。南無八幡大菩薩。ねがはくバ妖蛇の怨霊退けかし。妻や子ハ苦痛を拯ひたへやと念じてやがて枕辺より。足の上までふりまハせバ。側なる窓をうがちて一團の鬼火飛いでしが。典膳是におどろきて。吐嗟とおどり見おくる間に。忽ち妻子ハ大熱ハ煩悶もなくまて心地清しくなりけりん。ちやく眠る光景な

きび典膳い大歓びて刀ハ威徳と感歎し。刀室ゑ納めく枕
辺ふさ〜ゑて自身もまくゑ要時聞こぞ入より。其翌夕
も常ゑごく睡ふ付んとする折ゑ。例の老人出こゑ
ゑく。典膳ゑ枕ゑ立そひ。怨とのべんと志ゑりしゑば。典
膳ゑハと飛おゑて枕辺ふおゑゑり〜。名刀ゑ〜りとゑく手
もゑそび。老人目ゑけ丁どゑる刀ハ名刀切人ハ手練なふ
ゑハのゑくゑるべゑ。苦と一声ゑけびもりへば。堂とゑれ
きゑ〜ゑれ死骸をよゑく〜ゑれがこいふふ。老人ゑ〜で妻ゑ
枕女。二段ふゑりゑく死でり。妖物ゑふおごろゑそ。そゑふ

臥る鹿之進。とゑこ起出呆ゑ。其ゑへとゑひ亡母ハ。死
骸ゑいゑゑ付んとするふ。其創口ゑりゑゑゑ赤蛇頭と
ゑ〜べゑゑひ出りけ。ゑゑゑ舌とひ〜ゑゑ。ゑゑゑ眼と
睨ゑ。典膳父子とゑる光景ゑも怨〜く物ゑごく身の毛
もゑゑゑりゑ。親子ハ是ゑ驚ゑ〜ゑ。おもゑゑゑへ二足
三足逡巡ゑゑゑゑれば。彼蛇の形ハゑ〜ゑ。呆〜ゑゑ〜
ふうりゑり。ゑゑゑ心ハ迷ひゑり。ゑく妖〜ゑりハゑへ
ゑ〜ん。女ゑ〜りゑゑ親ゑ子ゑ心ハ内ゑゑゑ〜ひゑく。共
ゑ斉一嘆息ゑるのゑ。ゑ〜ゑ辞ゑふゑり〜ゑ。典膳ハ白

刄をうけてとなげすてゝ。堂と坐をしめ手を叉き。遇世のその
なる因果まつくがるゝれ目ハまるもかりん。亡父の遺言を守
らく骸と帆の谷に。葬ありくし匕がこれ災の。たゝしとするり
ゝ婦や子れ。鬼病のくまゝをえられしのびバ。夫を助んと
てさめぐと。心を焦しゝ世てありがくれ。名鈒をのとめ得
られバ。妖蛇のまざいいも消散せんと。思ひしるすハとぶ鳥
の。鷭の觜と喰らびいて。それ刀めて妻をさへ。手りうけ
るゝより浅ましく。やよ楓女よ吾をふとしまそ。吾儕ゐを
汝を助んとく。その妖蛇の幽灵をきしんと。おもひ思ひバよ

汝をころしも因果のふかんまぐ。彼妖蛇の怨灵とゝへしハ汝
汝ぞとゝへし。彼怨灵なるべし。やよ鹿之進甚なるがくさ
そ。まぐ今吾儕がいひしぞくゞみる是因果のあれところ
りそ。なげきてくへるまるあしれバ。後悔も其処よ立ぶとし。
まぐ其妖へハ弥陀の名をとるへく。祖父や亡母が冥福をい
のるより。外よ術いあれぞなし。かゝる嘆きの中にもよろ
こぶべきまるしとハ。汝よ故障あるまるのを。今宵いわけも
さしおゝしぬる。何ともなきさいかやと。慰めつ又さぐめる
よ。鹿之進いなくゞるぞしゝ。智勇兼備の家尊の大人の。御

こころよさへ。くゝむりゝ悔こうげうせのふるふ。況て吾倫が愚智文盲。大家は此世は此世にうまれ。なげうぜば居らるべき。尋常は御病気こゝく。千療万治とくこゝへども。愈こゝ

いぶかくうりのゝく。天命うりとせめく又。ぐさ〳〵わやくも有べりれども。世ふもまれる妖蛇の。邪崇よりく大熱の。病い現在此世の。叫喚ぢごくは火は車。それのきゝ

び我大人の。御おやさちといいひるぐ。歛の山は双よう。死うりのふい遇世より。定る因果るべりれども。是とおも

へば後は世の。罪も左〳〵そとおもいれ。いもるゝ〳〵べる

うり。吾済もひ〳〵く今霄〳〵もうれ怨夭の寅縁うだ

ともよ御手〳〵うて。死で慈母はもせんよ。何くもうれ

こゝこゝ〳〵あれと。心はうぞりかくぐく。胸ハ八千代のくま

つだれ。ちりてそうれを母おやは。死骸ふひ〳〵とそぐりて。

嘆きさけぶで道理なる。かゝれ立らんく典膳も。嘴乃羽

ぐさ百羽ぐさ。百度千〳〵悔念へど。身のいやまりは今

さに取〳〵〳〵返さんね。執念ものくゝとばぐけて

〳〵るれ〳〵やー〳〵さんの夜ゆ〳〵も甲乙のいくめ〳〵言と

用ひ〳〵〳〵。かくまで勇〳〵れ災と。引ぐ〳〵る面目なさ

十八ノ二 宝玫堂蔵

假令人にしらせずとも。亡骸は埋ずとも。いつまで匿しおほ
べきならねば。一家一門人々にも。此よしを告しらして。我愆を
懺悔しつ。それより兎角もかうもと。人々をしらせ人々を呼
集て有枝有葉とぞうりきまえてその日のくれに。野辺
にあくりを一片のけふりとなしてハかなしまはるかくて光陰矢
のごとく。なげきの間に立月日四十九日や五十日ちや百日の
弔ひも。おどちうれ秋の半となりられども。かの老人はその
夜よりぞふんへて又来ることなく。鹿之進が鬼病さへ殆佗
すりてなくりしかば。茨木父子は大ひによろこび是全く

竜丸の刀のきどくなりけりと。さまりふ劔と称賛し。霎
時も側とはなさゞりしが。護身刀となれそなりし。原来盗し
そみられば。のしうや人のかゝらんかと。影護心地すれば。城中
へ還さんと。おもへども又此刀ゆへさば妖蛇の怨炅の。まさも實
縁るやかゝらん。ゆかばいせんと案じまどひし。子息鹿之進
と召よりて。心中とつぐることなん。鹿之進つくづくと。父がことば
とききて。霎時沈吟しかりしが。莞尓と笑てひざ
すゝみよせ。仰はさるものなれども。此竜丸は稀世の名刀。寄
特は申上ざとも。よくしろしめれ処なり。かくる尊き名劔を。

まさ得んとて得せんとせんや。得がたき宝を手に入ならば。ふたゝび還すまじやハあるべし。此まゝにとゞめおきなし。家の宝となしのべと。いふは典膳頭を打たり。汝が言理に似て非なり。いかにも得がたき宝刀なれども。今是をもって家に秘蔵ありしそれなれば露覚せバ何とか申ひらくべきいひわけせん。言ひわけなければ吾ハ切腹家ハ遂に断絶せん。ぞれも心つかざるハ。実にいさき心なれ。汝当年十七才早稚しといふべからじ。とくとおもひ考へみよ。そちの言ふからざしぞと。窘められても些ともさはがじ。只今の御教訓。いと

ありがたくうけたまハりぬ。命を下されし恐れなれど。左ながら弁へぬき小人にていはんぞ。くし此まゝに露顕せ家ハつぶれんぎに及ばんとあれハ城主とても家中にかくせんく。討まじらべをまとハ申せども。戦国に若ことまし。臣として君をもすなハ。不忠なくかあらん。然れバ古人の詞にも。財を偷むものハ誅せられ国を盗むものハ侯となるといへ。おもてらハるまつすべし我家今ハ苗字を更め臣下の列に坐すといへども。先祖ハ同じ宇羅上氏。假令城主に代るとも。なんぞ臣を家にせハいハンド。

と言せもあんび典膳いおいて〜頓さく口ユ手とりく。音〜〜〜
人やいさらん。吾倘いまさそれ心なれ〜いわ〜ねども。汝が
心と引うん〜め。こうぎとかく〜言さるん。栄利とさろ〜も子孫
ぬ〜め。汝り〜不肖ふ〜ぶ労じ〜功るれるのなりと。あり山
〜〜ふ〜ろ〜〜り〜。わ〜ねるとが言つるなり。汝もあるとそ乃
志あ〜ぶ。我又何とう患んや。こ〜い甚ざち〜ちこく。大事
とう〜る処ふあ〜び。こるる〜へ〜れと奥まり〜る。一間に伴ひ
何〜れと。機密と相譚ひ喋じ合せく。蛇塚と苗字たり〜
〜り潜ひ〜〜ま一味と相譚ひ。陰傑とご企ざてる。心ぬ程

こと恐し〜〜れ。ちきこれ嚮ま焼ころされ〜。妖蛇の祟すく
典膳り一族と赤くふ〜んとするなり〜り。寔まる佛
家ま愚昧ふる女童と諭さ〜んと〜て。所謂因果報応乃。
理い恐きて。猶畏るべきてりなり〜。かくてそれと〜〜
くまて。明きび応仁と改元あり。今茲二月の頃より〜〜〜。
摠管領細川勝元山名宗全と確執す〜。属国の大小名。
徴ま応じ〜〜せのわる。其勢合せく二十余萬騎。皇都
ま集會両家ま荷担ぬ。細川ハ東ま陣〜。山名ハ西ま陣
ととり〜。互ま竜虎ぬ威とり〜〜〜。世い大変となり〜〜。

時しも宇羅上則宗公い京師の守護職なりしれば。宮闕を守護しまいらせ。本国へ使ともせこ。此度ぜいれば。余ハ禁闕ちう陣し。非常とゝもに賊と防ん。汝ホのゝりてわゞもゝ中ゝと守護いたべし。命こしのひれば。典膳父子い時ゝ。潜ゝとひ津口よ舟を得しこちして。慌忙しく其准備と整へく。即時よ都へ馳つゝり。益一味と相譚る。是よ従ふ人ゝ。荒牧勇馬宮内玄蕃 秋月桂太夫 大西庄左エ門 それ外ゝの悪侍皆其黨ゝ与しれども。同僚鎌田利兵エ盛直一子

淡海之助忠直父子ハ。忠弐金鉄ハ武士ゝれば。こしに埒ふけしとゝるれば。典膳父子い大甚。此両人とゝ。ふくこ。いのもしとゝるれ父子と。ゝりぞりんこゝろうる

花月奇譚 巻之二終